古田史学の会・東海

# 東 海 の 古 代

第１６１号　平成２６(２０１４)年１月

会　　長：竹内　強
編集発行：事務局　〒489-0983　瀬戸市苗場町137-10
林　伸禧〈Tel&Fax：0561-82-2140、ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ：furuta_tokai@yahoo.co.jp〉
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ：http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

## ２０１４年　年頭にあたって

会長　　竹内　強

新年あけましておめでとうございます。

今、私の本棚の真ん中に一段ずらっと２０１０年からミネルヴァ書房から発行された「古田武彦古代史コレクション」が並んでいます。このシリーズはまだまだ続き、２７刊「古代通史」まで発刊が計画されているようです。２０１１年には待望の書ミネルヴァ日本評伝『俾弥呼』が出版されました。更に、昨年は古田先生の自伝『真実に悔いなし－親鸞から俾彌呼へ　日本史の謎を解読して－』も同じミネルヴァ書房から、また、「古田武彦・歴史への探求」シリーズとして『俾彌呼の真実』、『史料批判のまなざし』、『現代を読み解く歴史観』の３冊がミネルヴァ書房から出版されました。

次々と出版される新しい本を手にしながら、先生のご活躍に心より敬意を表し、これからも健康に留意され古代史の研究を発展されるよう、心より祈念致します。

昨年、浅田次郎著『一路』を読みました。この小説の中で「一所懸命」という言葉が登場します。これまでわたしは、この言葉を知りませんでした。「一生懸命」・・・脇目もふらず頑張るという意味で使ってきました。ところが、この小説で浅田次郎は「一所懸命」とは、自分に与えられた使命、仕事を命をかけて励むこととして描いています。この考え方こそが明治以前の日本人の思想の中にあったというのです。

小説『一路』は大名行列の話です。時代は幕末十四代将軍家茂の治世、皇女和宮が江戸へ向かった同じ中山道を西美濃田名部藩（架空）のお殿様と若干十九歳の若き家臣小野寺一路を責任者とする大名行列が、お家騒動と絡み江戸に向かってゆく波瀾万丈の物語です。新たに知ったことですが、一万石以上の侍を大名と呼び、それ以下は旗本で大名とは呼ばないそうです。しかし、位や格式は大名よりも上位に位置づけられている旗本もいました。この小説の主人公は交代寄合という役職です。こうした旗本も領地を地方にもらえば、参勤交代が義務づけられていました。小さな藩にとって参勤交代は大変な負担だったようです。小説の最後に、七千五百石取のお殿様に将軍が直々に家禄を二千五百石増やして一万石にしてやると云うのですが、この旗本は断ります。「自分は今の領地でそこに住む領民の事を大切に生きてゆきたい。『一所懸命』励みたい」と云うのです。

私も古田史学と「古田史学の会・東海」の発展の為に、今年も「一所懸命」に頑張りたいと思います。

# 繊維街の源流を求めて（その1）

名古屋市　加藤勝美

## １　発端

私が名古屋繊維街の源流に興味を抱いた発端は意外なことからです。今から４年余前の２００９年１１月、私は尾張国内に現存する式内社を全部巡り歩いてやろうという気を起こしました。ひとつひとつの神社をすべて巡り歩いたのですが、その終盤近くになって織物関係の神社と目される神社が存在している事実を知らされたのです。それを知ったとき、私はその事実に興味を覚えたのです。名古屋は中区にある繊維街の長者町で知られるように、古くから繊維産業が盛んなところです。が、それはさかのぼっても、せいぜい江戸時代以降のことと認識していました。ところが式内社の中に織物関係の神社が存在するとなると、穏やかではいられません。その源流は一気に６００年以上も前にさかのぼることになるからです。詳細は次回以降に後述するつもりですが、その前に、順序として、私が尾張国内の式内社をすべて巡り歩くに至った経緯その他を述べておくのが親切というものでしょう。以下、概略に過ぎませんが、織物関係神社に巡り会うに至った経緯等を述べることとしましょう。

## ２　式内社

古代史をかじったことのある人なら式内社といえばぴんとくるでしょうが、４年前までの私は「式内社」という用語を耳にしたことはあってもその内実は全く不案内でした。式内社とは何なのか、なぜそう呼ばれているのか全く知らなかったのです。私同様不案内の人もおられるかと思います。なので、その方々の便宜をはかるためにも、式内社の概略を述べておきましょう。

式内社というのは、延喜式神名帳に登載された神社のことをいいます。では式とは何かですが、律令制下における実施細目を定めた法令の一種です。現行法でいえば、律が刑法、令が一般法に相当しますが、その下に格（きゃく）が定められ、さらに施行細則に相当する式（しき）が整備されました。延喜年間（９０１～９２３年）に編纂されたので、延喜式と呼ばれています。

延喜式の編纂開始は延喜５年（９０５年）、完成は延長５年（９２７年）といわれています。その際に全国の神社の調査が行われ、延喜式内に神名帳として定められました。「式内社」とはその神名帳に登載された神社のことなのです。「式内社」は今風にいえば朝廷から幣帛（供え物）を受ける、いわば朝廷お墨付きの神社というわけです。これに対し神名帳に搭載されなかった神社のことを式外社（しきげしゃ）といいます。式外社（しきげしゃ）は何らかの理由で登載されなかっただけなので、それ自体、式内社と並ぶ由緒深い神社ということになります。

が、大切なことはそのことではなく、「式内社」に登載された神社は、延喜式の編纂開始頃（すなわち９００年代の初め頃）には、確実に存在していたことです、ざっと１１００年ほど前にさかのぼる神社ということになります。

つまり、「式内社」は少なくとも１１００年以上前に創立された、おそろしく古く、非常に由緒深い神社ばかりなのです。

「延喜式神名帳」に登載された神社は全国で２８６１社（内大社とされたものが３５３社）あります。このうち、尾張国内（名古屋を含む愛知県西部）の神社としては１２１社（内大社８社）が登載されています。

## ３　尾張国式内社

前述したように、全国２８６１社中、尾張国内の式内社は１２１社にのぼっています。

さて、１１００年以上も前に創立された尾張国内の１２１社中、現在何社くらい存続しているのでしょう。全体の四分の一も残っているのでしょうか？　いえいえそれ以上残っているのです。では三分の一？　二分の一？　いえいえ、なんとほとんど全部といっていいほど、この現代の世に存続しているのです。１２１社中、廃

絶がはっきりしているのはわずか５社を数えるに過ぎません。存続に疑義のある社もあって、近い将来廃絶社であると確認される社もあり得るでしょう。が、かりにそうした社があったとしても､せいぜい数社にとどまることでしょう。

１１００年以上も経っているのに、ほとんどすべてが残存している！！　これは尾張国のみならず、全式内社に言えることでしょう。このような残存率は世界的にみてもきっと類例を見ないに相違ありません。というより、驚異（奇跡）の残存率を誇っていると断言してよいでしょう。

私は、１１００年以上に渡って営々と存続してきた（すなわち人々の支持を集めてきた）驚異的な式内社群のことを知って一気に魅せられてしまったのです。全国２８６１社をすべて巡訪するのは無理にしても、地元の尾張国内だけなら何とかなりそうに思ったわけです。そこで尾張国内に限定し、実際に訪問してみる決心をしました。私は由緒深さに惹かれてすべての式内社をしらみつぶしに巡ってみました。

式内社の中には複数の神社が候補にあがっているものもありましたし、旧社（元宮）も現存している社もありました。なので、実際の実訪神社数は１２１社ではなく、全部で１６０社ほどにのぼりました。もしもその神社の様子を知りたい方がおられたら、インターネットのブログ上に掲載しているのでそちらによっていただきたい。一社一社漏らさず写真とともに記事を、掲載しているので参考にしていただければ幸いです。ブログは「古代史の道　加藤」と入力して検索すると開く筈です。

さて、この式内社巡りの終盤近くになって私は織物関係神社と目される３社に出会うことになったのです。この３社はすべて旧山田郡内に存在しています。旧山田郡は春日部群の南部に置かれていた郡で、現在は、北は瀬戸市から南は日進町にまたがる帯状の地域。名古屋市北区と東区の一部等が含まれている地域です。

綿神社（わたじんじゃ）、多奈波太神社（たなばたじんじゃ）及び羊神社（ひつじじんじゃ）がその３社の名ですが、そのすべてが東西３キロ、南北３キロの中に鎮座しているのです。そしてこの狭小な３キロ平方内に３社のほかに片山神社（かたやまじんじゃ）と別小江神社（わけおえじんじゃ）を加えた５社が集中しているのです。１１００年余も以前から狭小な３キロ平方内に５社がひしめいていたわけです。一枚の地図を掲げておきますので参照してください。

前置きはこのくらいにして、次回からこの３社を中心に、古来から名古屋が織物が盛んだった可能性について私の見解を述べてみたいと思います。

# 鉄の古代史

知多郡阿久比町　　竹内　強

## １、世界最古の鉄

世界で最初に鉄器を使用したのは紀元前２２００年頃のヒッタイト（現在のトルコのあたりにあった国）人たちです。彼らは金を採取する副産物として鉄を手に入れました。しかし、この鉄もそれを得るための技術は極秘扱いとされ他の国や地域へは流出されませんた。巨大な帝国をを築き上げたヒッタイトですが、紀元前１２００年頃崩壊してしまうと、鉄の生産技術は中東各地に､更に世界各地に広まっていきます。

## ２、世界に広がる鉄生産

①　インド（南インドの古代タミル文化圏）
紀元前１１００年頃のインド最古の聖典『リグ・ヴェーラ』には鉄や鉄製品を表す言葉が多数記されています。
　アイアス（鉄）、アシ（聖なるナイフ）
　カラマーラス（鍛冶師）
　南インドで生産された鋼は「ウーツ鋼」として有名です。インドから中東のダマスカスに輸出され、ここで鍛冶加工され「ダマスカスの剣」となり、この剣はエジプトやヨーロッパ王侯のあこがれの武器であったと云われています。

②　南イタリアから東欧･北欧へと伝えられた技術は、沼鉄鉱を使った簡易炉（ポット炉・ボウル炉）で、スウェーデンでは１８世紀まで行われていました。

③　中国（春秋・戦国時代）
　紀元前４００年頃鉄器が普及し、四川・成都では大型鋳造炉を使って鉄器の生産が行われていました。（耐火煉瓦・往復動ふいご）
　前漢代には「炒鋼法」（銑鉄を脱炭して鋼を改質する工法）も行われるようになりました。

④　朝鮮半島
　鉄生産の技術の流入は二つのルートが考えられます。
ア、中国楽東郡からのルート
イ、「スキタイの鉄文化（紀元前８００～４００年）→フン族→東北燕」のルート
　『三国志』魏書 東夷・弁辰条には
　**國出鉄。韓濊倭、皆従取之**
とあり、３世紀当時にどのような形かは解りませんが、文献には朝鮮半島南部で鉄の生産が行われていたことが紹介されています。
　実際に鉄製品も大量に出土する遺跡も発見されていますが、肝心の製鉄炉が発見されていません。中国からの精錬技術である「炒鋼法」もいつ頃入ってきたのか特定できていないのです。

## ３、日本国内における鉄器の出土

日本での鉄製品の出土は水田稲作とほぼ同時に出現します。北部九州の菜畑遺跡、曲り田遺跡、板付遺跡などから鉄製の斧、鍬などが見つかっています。弥生時代では鉄製武器を始めとする鉄器は北部九州に集中しています。
古墳時代に入り、全国的各地で鉄製品・鉄製の武器が出土します。
ところが、朝鮮半島と同じように明確な製鉄炉が発見されていません。こうした中でこれまで「たたら」などを使った鉄生産は６世紀以後古墳時代に入ってからだというのが、定説となっているのです。

## ４、新たな視点

これまでの定説は日本への伝播のルートは中国から朝鮮半島を経由して日本にもたらされたと考えられてきました。
ところが、インドから製鉄技術がもたらされたのでないか？と言う説もあります。「多元的古代研究会」の下山昌孝氏は「たたら製鉄の起源と歴史」（『多元』NO.９９・１００、２０１０年９・１１月）及び「製鉄技術の多元的発展」（『多元』NO.１１８、２０１３年１１月）で、南インドのタミール文化圏から伝来したのでは

ないかと提起されているのです。

下山氏はこの中で日本の弥生時代の年代が１４Cの年代測定によって、紀元前１０００年まで遡ると中国、朝鮮半島からの技術導入は難しいのではないかといっています。

私もこの説に大いに魅力を感じます。ただ下山氏の論で納得いかない点は、「たたら炉」により製鉄が行われたのではないかと述べている点です。

弥生時代早期に「たたら炉」の技術があったとしたら、１５００℃の温度を弥生人は作り出せたことになるのです。弥生式の土器はせいぜい１０００℃程度の熱で焼いています。更に高温を必要とする須恵器の生産は古墳時代に入ってからなのです。これまで「タタラ」に拠る製鉄が古墳時代以後だと言われてきたのはこのためなのです。

では、「タタラ」がなければ製鉄はできないのでしょうか？

## ５、塊鉄炉を使った沼鉄鉱

ヒッタイトで始まった鉄生産の最初の形態は、褐鉄鉱による製鉄でした。褐鉄鉱とは、鉄バクテリアの代謝生成物で、川や田に見られる褐色の浮遊物･沈殿物として草や木の根にも何重にも重なりついたりします。「カナクソ」という小字名が私の住む町にもありますが、これは褐鉄鉱がバクテリアによって水に溶けだし褐色に染まったものが田や沼地に流れ出し沈殿・堆積し赤く染まった所のようです。

この土を乾燥させ８００℃の温度を加えると赤、オレンジ色に発色し、染色剤として利用されます。これが弁柄（ベンガラ）です。ベンガラは日本各地でとれます。特に有名なのは阿蘇のリモナイトで現在も露天掘りが行われています。

このベンガラに更に熱を加えると、かなり純度の高い鉄ができるのです。鉄鉱石や砂鉄を使った製鉄では１５００℃近い高温が必要ですが、この方法では８５０℃～１０００℃程度の温度で製錬が可能なのです。この製鉄方法によれば「タタラ」を使わなくても鉄の生産ができることになります。大規模な製鉄炉も必要ないのです。

２０１０年に発見された阿蘇谷の集落遺跡から大量の鉄器類とともに鍛冶炉が発見されていますが、それらの中で「ベンガラ」を材料とした製鉄が行われていた可能性もあります。

弥生時代の鉄器の出土量は福岡県が最も多く、次いで多いのが熊本県、三番目に多いのは阿蘇の東に位置する大分県です。北部九州での鉄は阿蘇のリモナイトを使用し作り出された可能性が高いのではないでしょうか。

## ６、「魏志倭人伝」の中の朱と丹

では、このベンガラについて考えてみましょう。『三国志』魏志倭人伝のなかに注目される次のような記事があります。

①倭地温暖冬夏食生菜皆徒跣有屋室父母兄弟臥息異處以朱丹塗其身體如中國用粉也

倭の地は温暖、冬夏生菜を食す。皆徒跣。屋室あり。父母兄弟、臥息処を異にする。朱丹を以てその身体に塗る、中国の粉を用いるが如きなり。

②出真珠青玉其山有丹其木柟杼豫樟楺櫪投橿烏號楓香其竹篠簳桃支有薑橘椒襄荷不知以為滋味

真珠・青玉を出す。その山には丹あり。その木には柟・杼・予樟・楺・櫪・投・橿・烏号・楓香あり。その竹は篠・簳・桃支。薑・橘・椒・蘘荷あるも、以て滋味となすを知らず。

③又特賜汝紺地句文錦三匹細班華罽五張白絹五十匹金八両五尺刀二口銅鏡百枚真珠鉛丹各五十斤皆装封付難升米牛利

又特に汝に紺地句文錦三匹・細班華罽五張・白絹五十匹・金八両・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠・鉛丹各々五十斤を賜い、皆装封して難升米・牛利に付す。

④（正始）其四年倭王復遣使大夫伊聲耆掖邪拘等八人上遣生口倭錦絳青縑緜衣帛布丹木拊短弓矢掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬

その四年、倭王、また使大夫伊声耆・掖邪狗八人を遣わし、生口・倭錦・絳青縑・緜衣・帛布・丹・木犬・短弓矢を献上す。掖邪狗等、率善中郎將の印綬を壱拝す。

（岩波文庫『新訂 魏志倭人伝他三篇』46～52頁）

「倭人伝」の中に以上４カ所「丹」の文字が記述されています。

・①及び②の朱丹・丹は、倭国の風土習俗を表しています。
・③の鉛丹は、魏から倭に下賜された品物の中に含まれていた物です。
・④の丹は、倭から魏に送られた献上品です。

① 倭人は中国人が白い粉を身体に塗るように朱丹を身体に塗っています。

② 倭の地では真珠・青玉を出す。そして、山には丹があると言っています。

ここで云う「丹」とは何でしょうか？

倭人が身体にぬっているもの、倭の山からかなり大量にとれるものです。古代から使われた「丹」は、次の三つが考えられます。

・一つは「ベンガラ」褐鉄鉱(Fe203)
・二つ目は「辰砂」硫化水銀(Pb304)
・三つ目は「鉛丹」四酸化三鉛(HgS)

弥生時代の遺跡からは赤で染色された遺物が多く発見されており、その多くはベンガラが使用されています。硫化水銀も使用されていますが、その例は極僅かで極めて特殊な使われ方をしています。とは云っても残念ながら１９６０年以前の遺跡の調査では赤の染色剤の成分分析は行われていないので確かな事として断言ができません。

山田宗睦氏は『魏志倭人伝の世界』[*1] の中で「倭人伝」に云う朱丹は硫化水銀と述べています。また、多くの歴史学者は中国の仙神思想との関わりから赤の染色は水銀朱と決めてかかっているようです。硫化水銀の産出地は紀伊半島から四国の中央を横断し大分、佐賀あたりまで伸びています。それだけを考えれば、「倭人伝」の朱丹は硫化水銀であってもおかしくないのかもしれません。

これに対してベンガラ（褐鉄鉱）は日本全国どこでも採取できる物です。特に阿蘇山の周り、山陰地方、東北、北海道などにみることができます。大和地方でも生駒山系・奈良盆地から、大阪府の交野市あたりもパイプ状ベンガラを産出します。

「鉛丹」は古代ではほとんどつかわれていません。平安時代になって本格的に使用されたようです。

なお、最初に出てくる真珠が実は、朱（硫化水銀）の事で、『続日本紀』文武天皇二年九月条には

**令……献……、豊後国真朱**

豊後国には真朱を献じさせた。

（新日本古典文学大系『続日本紀』一、24頁）

とあり、ここでいう真朱は硫化水銀の事であるというのです。

③ これは中国の魏から倭国に下賜されたものです。ここで云う鉛丹こそ水銀朱ではないのでしょうか。これに対し、真珠こそが水銀朱ではないかとする学者（岡崎敬九州大学名誉教授）もいます。いずれにしても、魏は倭国に貴重な物として水銀朱を送っているのです。この時まだ、倭国では水銀朱の産出があまりなかったか、或いは少なかった証拠ではないでしょうか。

④ この丹についてはいろいろな解釈があります。

丹の文字に続く木の字とつながり「丹木」と読むのではないかというのです。では「丹木」とは何でしょうか？

今のところ明確な答えは見つかっていません。

以上、見てきたように倭人伝の世界では丹(ベンガラ・褐鉄鉱)は倭国の特産品です。それは、倭人に取っては日常品（化粧、土器の染色剤、死者を埋葬する時の飾り）であったのです。これに更に熱を加えて鉄鋼(はがね)にしであろうことは、容易に想像できます。弥生時代の遺跡の中に鍛造炉を持つ遺跡が全国各地で見つかっています。しかし、これらは本当に鍛造のためだけの炉なのでしょうか？　これまでの考古学者や歴史学者は「タタラ炉」や大規模な溶解炉でなければ砂鉄や鉄鉱石から鉄を溶かし出せないとい

*1 『魏志倭人伝の世界』：山田宗睦著、教育社歴史新書〈日本史〉22、教育社、1977年8月

う幻想に犯されていたのではないでしょうか。規模の小さなポット炉・簡易炉でもベンガラを使った製鉄は可能だったのではないでしょうか。

## ７、東海地方の鉄

東海地方に目を移すと、岐阜県大垣市に美濃金生山（赤坂）があります。弥生時代には、この地域に伊勢湾が奥深く入り込んでいました。赤坂はその最北端に位置し、その後も揖斐川上流からの物資を桑名まで運ぶ中継基地として、更に京から江戸へ向かう姫街道と呼ばれた中山道の赤坂宿として江戸時代は大いに栄えた処です。又、明治以後は金生山から出土する石灰岩の積み出し港となりました。この地が、何故赤坂と呼ばれるようになったかについて、三重大学名誉教授の八賀晋氏は「花崗岩の中の鉄分がバクテリアに冒され水に溶けてこのあたりに流れ出ていた、赤く染まった水が流れ出していたのでこの名前がついたのであろう。」と言っています。

尾張地方の代表的な弥生式土器であるパレススタイル土器には、このベンガラが染色剤として使用されています。金生山の南山麓には古墳が沢山存在します。中でも昼飯大塚古墳（古墳時代前期末）は岐阜県下最大の前方後円墳で、鉄器も沢山出土しています。

ここから、更に南に５００メートル程行ったところから、１９９８年、高速尾張環状線の大垣西インターの工事中に「荒尾南遺跡」が発見されました。縄文晩期から古墳時代にかけての遺跡で３００基の墓、６００軒の建物跡、３５０万点に及ぶ土器、１０，０００点の木製品が出土しました。中でも８０本のオールにたなびく旗、イチョウ型の舟先が描かれた土器は当時のこの地域の姿をよくあらわしています。また、巴型の青銅器も発見されましたが、その裏側に赤くベンガラが塗られていました。

谷川健一著『青銅の神の足跡』[*1]には

南宮神社の祭神は金山彦命である。金山彦命とはいかなる神か。『日本書紀』に「伊弉冉尊、火神軻遇突智（かぐつち）を生まむする時に、悶熱（あつか）ひ懊悩（なやみ）む、因りて吐（たぐり）す。此神（これかみ）と化（な）為る。名を金山彦（かねやまびこ）と曰（まう）す」とある。「たぐり」は金属が溶けて流れるさまを描写したといわれる。鉱物の神であるので、鋳物業者の尊崇を集めていることは、南宮神社の拝殿の脇にもうけらけた展示箱に、各地の鉱石が献納されていることでも察せられる。

その中で、とくに私の目をひいたのは、不破郡赤坂町（現大垣市赤坂町）の赤坂鉱山と記してある名札である。赤坂という地名は垂井町の東どなり、赤坂鉱山は金生山にある。　……　地図で見ると金生山のふもとに金生神社があり、その更に南には南宮神社とは別に金山彦神社がある。

……

私は社務所に立ちよって宮司の宇都宮敢氏から話を聞いた。……　金生山の北がわには鉄、南がわには銅が多く産すること、また戦時中までは鉱山として採掘をおこなっていたこと、関の孫六で有名な関市の刀工は赤坂から移ったのだという話などは興味ぶかかった。

（『青銅の神の足跡』41･42頁）

この南宮山から更に西へ関ヶ原方面に向かった行くと「伊吹」という集落があり、伊富岐神社がまつられています。

この伊富岐神社は伊福部氏の氏神であろうとされており、現在は宮司もいない寂しい神社ですが、７１３年（和銅六年）には存在したと云われています。延喜式神明帳にのせられた式内社で美濃国の二宮です。（一宮は南宮大社）

御祭神は多多美彦命・八岐大蛇・天火明命・草葺不合命とされ、伊福部氏は息吹部氏、五百木部氏とも呼ばれ全国に分布しています。そして、その多くが鉱山や鉄・銅の鍛冶と係わっていたとの伝承が残ります。ここにいた伊福部氏もまた、伊吹山の風を利用し「タタラ」を操った鍛冶集団であろうといわれます。

美濃赤坂の金生山・南宮山の金山彦神社・伊富岐神社と大垣市から垂井町にかけての西美濃地域は、古代における銅や鉄の一大生産地のようです。

*1　『青銅の神の足跡』：谷川健一著、集英社、1979年6月

## ８、製鉄の技術はどこから日本にもたらされたか？

ベンガラとはかつてインドのベンガル地方から輸入されたのでその名がついたと言われています。日本国内にベンガラの原料である褐鉄鉱が存在し、染色剤としては既に縄文時代から利用されてきましたので、遠く海を隔てた天竺からわざわざ持ってくることもないと思われます。ベンガラに高温を加えて鉄を作る製鉄技術をインドから伝えられ、その名が付いたのではないでしょうか？

福岡県糸島市の雷山千如寺大悲王院の縁起には

**当山は成務天皇の四八年（178年）、雷山の地主神である雷大権現の招きで渡来した天竺霊鷲山の僧清賀上人の開創と伝えられている。**

（雷山千如寺大悲王院パンフレット）

また、清賀上人の伝承には福岡市油山に胡麻栽培して油を作ったというものもあります。

この伝承と同じ時代、朝鮮半島の南端の金官加羅では初代王の首露王（１５８年～１９９年）の時代に王妃の許黄玉（ホ・ファンホ）はインドの商人の娘と伝えられています。首露王は鉄の王とも呼ばれるように製鉄と関わりが深い。

二世紀後半、玄界灘を隔てた金官加羅と倭にインドから製鉄技術が伝わってきた可能性が大いにあるのではないでしょうか。でなければ弥生時代の大量な鉄製品の説明が付かない。

## 非　時　香　菓

名古屋市　　石田敬一

『日本書紀』の垂仁紀に、次のとおり常世の國に「非時香菓」があると記述されています。この「非時香菓」は『古事記』には「登岐士玖能迦玖能木實」とあり「ときじくのかくのこのみ」と読まれますが、ここでは書紀に従って、「ときじくのかぐのみ」とします。

**九十年春二月庚子朔　天皇命田道間守　遣常世國　令求非時香菓**（香菓　此云　箇倶能未）**今謂橘是也**

（日本古典文学大系『日本書紀』上、P. 279）

垂仁九十年二月庚子の朔に、天皇は田道間守（多遅摩毛理）を常世の國に遣り、非時香菓（ときじくのかぐのみ）を求むよう命ず。香菓、此を箇倶能未（かぐのみ）と云う。　今橘と謂うは是なり。

（読み下しは石田による。以下同じ）

通説では、常世の國は、インドや中国、又は海の彼方にある不老不死の世界のこととされます。しかし、ここでは、常世の國は、「非時香菓（ときじくのかぐのみ）」すなわち「橘」いわゆるミカンの橘（学名 Citrus tachibana）がある國であると記述されています。

「非時香菓（ときじくのかぐのみ）」とは、時期ではないのによく香る果実という意味です。一般的に花や実が香る時期というのは、春から秋にかけてですので、「非時」については、季節を問はずの意味とすると、冬の時期でもよく香る果実ではないかと思われます。そして、橘は、花も実も香りが強く、冬の間中、橙色の実がなり、緑の枝葉が生い茂ることから、「非時香菓（ときじくのかぐのみ）」として相応しい果実です。書紀編者は、橘が常に青々として、実が落ちずに変わらない樹木であることから、常世の國に生える木と考え、長寿瑞祥の樹とされたのでしょう。

『日本書紀』の皇極（こうぎょく）天皇三年（６４４年）に次の記事があります。

**此蟲者、常生於橘樹、或生於曼椒。**（曼椒、此云褒曽紀。）**其長四寸餘、其大如頭指許、其色緑而有黒點。其兒全似養蠶。**

（日本古典文学大系『日本書紀』下、P. 259）

此の虫は、常に橘の樹に生き、或いは曼椒に生きる。曼椒、此を褒曽紀と云う。　その長さ四寸余、その大きさ頭指許（ばか）りの如く。その色は緑にて黒点有り。そのかたちは全く養蚕に似る。

橘の木や或いは曼椒（山椒（さんしょう））に生きている虫が、蚕によく似た虫であるとされます。その形は蚕に似て、緑色で黒点のある虫と記述されますから、アゲハ蝶の幼虫、いわゆる青虫でしょう。これは、キアゲハの幼虫と思われます。

アゲハ蝶の幼虫である青虫は、ミカン、ナツミカン、キンカン、レモン、カラタチ、ユズ、サンショウなどミカン科の植物の葉しか食べません。この青虫の記述は、書紀に記す橘が、やはり柑橘類であることを裏付けるように思います。

しかしながら、橘は、古くから四国、九州を始め西日本の海岸沿いの山地に自生する日本固有の柑橘類であり、常世の國に生える樹木のイメージとは相容れないように思います。

この日本固有の橘の近縁種に、高麗橘（コウライタチバナ）（学名 Citrus nipponokoreana Tanaka.）があります。

高麗橘（コウライタチバナ）は、橘に似ていますが、果実は橘の方が大きく、中国原産と言われる柚（ゆず）と同様に強い香気を持つのが特徴ですが、柚は冬にはほとんど実を落としてしまいます。これに対して、高麗橘（コウライタチバナ）は、ダイダイと同様にほとんど落下しません。

垂仁（すいにん）紀に、次のとおりあります。

**明年春三月辛未朔壬午、田道間守、至自常世國。則賚物也、非時香菓八竿八縵焉。田道間守、於是、泣悲歎之曰、受命天朝、遠往絶域、萬里蹈浪、遥度弱水。是常世國、則神仙秘區、俗非所臻。**

（日本古典文学大系『日本書紀』上、P.281）

明年の春三月の辛未（しんび）の朔壬午（じんご）に、田道間守（多遅摩毛理）、常世の國より至る。則ち齎（すなわ もたら）した物は、非時香菓（ときじくのかぐのみ）の八竿八縵（はちさおはちつる）なり。田道間守（多遅摩毛理）、是にて、泣き悲しみ歎きて曰く、「天朝の命を受けて遠くより絶域に往（い）き、万里の浪（なみ）を蹈（ふ）み遥（はるか）に弱水を度（わた）る。是の常世の國は、神仙の秘区、俗の至る所に非ず。」

「八竿八縵」は一般には「やほこ、やかげ」と読むようですが、意味が分かりにくいので、「やさお、やつる」と読んでおきます。「非時香菓（ときじくのかぐのみ）」の多くは竿に串刺しにしたり、また多くは蔓に通して持ち帰ったという意味だと考えます。要する「非時香菓（ときじくのかぐのみ）」は串に刺したり、蔓（つる）に通すことができる適度な堅さと大きさがある果物ということです。橘の果実は直径３～４cmほど、高麗橘はさらに大きく、径６cm程になりますので、「八竿八縵（やさおやつる）」にマッチしていると思います。

もし、書紀の記す橘が、山口県萩市笠山と済州島にのみ自生する高麗橘（コウライタチバナ）であるならば、常世の國は、「絶域」すなわち海を越えた遠方にあるので、山口県の笠山より、済州島の方が可能性があるように思われます。

このように考えると、次のとおり、岩波文庫版『古事記』に、常世の國を済州島とする説を倉野憲司が校注で紹介しているのも頷けます。

**海のあなたに遠く離れた不老不死の国。ここでは済州島あたりではあるまいかとする説がある。**

（岩波文庫版『古事記』、P.114注五）

常世の國は、実際に田道間守（多遅摩毛理）が行ったとありますので、現実の場所とも考えられますが、ここには常世の國への具体的な行程や地形地物を示す記述がありません。もし、本当に田道間守（多遅摩毛理）が常世の國に往ったのだとしたら、人間業ではなかなかできないことなので、もっと誇らしげに詳細が記されるでしょう。

さらに「弱水を度（わた）る」という記述があります。「弱水」とは水に浮力がなく、普通の人間には渡れません。田道間守が常世の國に達することは不可能なことです。要するに、書紀編者は、常世の國の所在を具体的に示すことができません。ここでは、中国の不老不死の世界を観念的に常世の國として表現したのではないかと思われます。

『史記』の夾註に次のとおり、「弱水」は「崑崙」とともに記述されます。

**西王母，而未嘗見。**

**夾註［三］**

**【索隱】*1 魏略云:「弱水在大秦西。」玄中記云:「天下之弱者，有崑崙之弱水，鴻毛不能載也。」山海經云:「玉山，西王母所居。」穆天子傳云:「天子觴西王母瑤池之上。」括地圖云:「崑崙弱水乘龍不至。有三足神烏，為王母取食。」**

**【正義】*2 此弱水、西王母既是安息長老傳聞而未**

*1 【索隱】：史記索隠（しきさくいん）を表し、唐の司馬貞（しば てい）による『史記』の注釈書のこと。
*2 【正義】：史記正義（しきせいぎ）を表し、唐の張守節（ちようしゆせつ）による『史記』の注釈書のこと。

曾見，後漢書云桓帝時大秦國王安敦遣使自日南徼外來獻，或云其國西有弱水、流沙，近西王母處，幾於日所入也。然先儒多引大荒西經　云弱水云有二源，俱出女國北阿耨達山，南流會於女國東，去國一里，深丈餘，闊六十步，非毛舟不可濟，南流入海。阿耨達山即崑崙山也，與大荒西經合矣。然大秦國在西海中島上，從安息西界過海，好風用三月乃到，弱水又在其國之西。崑崙山弱水流在女國北，出崑崙山南。女國在于賓國南二千七百里。于賓去京凡九千六百七十里。計大秦與大崑崙山相去幾四五萬里，非所論及，而前賢誤矣。此皆據漢括地論之，猶恐未審，然弱水二所說皆有也。

（中華書局版『史記』／大宛列傳 P.3164夾註三）

『史記』の夾註からは、「崑崙」と「弱水」は大いに関連性があるように記述されており、書紀編者は、常世の國が崑崙にあると考えて記述しているように思えます。

さらに『山海經』には、「弱水」の川が崑崙山の麓の周りを流れている状況を示す記述があります。

山海經曰:「崐崘之丘，其下有弱水之川環之。」注云:「其水不勝鳥毛。」

（同版『後漢書』/張衡列傳･思玄賦 P.1923夾註四）

山海經曰：「崑崙の丘、その下に弱水の川有り、これを環る。」

注に云う：「其の水は鳥毛に勝えず。」

「弱水」についての注に「鳥毛に勝(た)えず」すなわち鳥毛さえも浮くことができないされます。つまり、「弱水」は、崑崙の麓を環る「溺れる水」を指しているのです。書紀編者は、常世の國は崑崙にあるとして、そこに至るのに「弱水を度る」と記述したのではないかと思います。

その崑崙の頂上の西には、次のとおり不死樹があるとされます。

[三]閬風，山名，在崐崘山上。楚詞曰:「登閬風而絏馬。」淮南子曰:「崐崘山有曾城九重，高萬一千里，上有不死樹在其西。」今以不死木為牀也。

（同版『後漢書』/張衡列傳･思玄賦 P.1932 夾註）

閬風は山名、崐崘山の上に在り。楚詞曰：「閬風に登るに馬を絏る。」淮南子曰：「崑崘山には、九重の層ある城あり、高さ万一千里でその上に（閬風）あり、不死樹はその西に在り。」今、不死木を以て床と為すなり。

さらに、『山海經』には、不死の国があり、不死樹である甘木の（実）を食べると老けないとする記述があります。

有不死之国，阿姓，甘木是食。

晋郭璞注:甘木即不死樹，食之不老。

（『山海經』大荒南經巻十五　webより）

不死の国有り、阿姓、甘木これを食う。

晋郭璞注「甘木は即ち不死樹、これを食うに老いず。」

以上の『山海經』や『淮南子』の記述にあるように、書紀編者は、まず崑崙をイメージして、「常世の國は、神仙の秘区」と記述したのではないでしょうか。そして崑崙には「弱水」が麓を環りますので、「弱水を度る」とし、さらに崑崙にある不死樹は、甘木(柑)すなわち柑橘であるので、「今橘というは是なり」と説明したのだと思われます。

つまり、書紀編者は、古代中国で不老不死の果実とされていた甘木(柑)を橘として、「非時香菓」と書いたのだと私は思います。

「非時香菓」は、もともと不老不死の果実など現実にはあろうはずもない神話の世界の果実なのです。

１５９号（平成２５年１１月）に引き続いて掲載します。

**１、はじめに**

**２、咸亨元年(６７０年)の遣唐使**

# 九州王朝の遣唐使（その2）

名古屋市　佐藤章司

## ３、白雉４年の遣唐使

## １）『日本書紀』から

① 白雉四年（６５３年）夏五月十二日条

大唐に遣わす大使小山上吉士長丹・副使小乙上吉士駒・学問僧道厳・道通・道光・恵施・覚勝・弁正・恵照・僧忍・知聡・道昭・定恵・安達・道観・学生巨勢臣薬・氷連老人‥‥‥すべて百二十一人が一つの船に乗った。室原首御田を送使とした。

第二組の大使大山下高田首根麻呂、副使小乙上掃守連小麻呂、学問僧道福・義尚、すべて百二十人が別の一つの船に乗った。土師連八手を送使とした。‥‥

秋七月、高田首根麻呂らが薩摩の曲（くま）と竹島の間で船が衝突して沈没して死んだ。

（講談社学術文庫『日本書紀』下、192・193頁）

② 白雉五年（６５４年）秋七月二十四日条

西海使 …… 吉士長丹らが百済・新羅の送使共に筑紫に着いた。

この月、西海使（注１）らが唐の天子にお目にかかり、多くの文書・宝物を得たことをほめて、小山上大使吉士長丹に少花下を授け、二百戸の封戸を賜った。また呉氏の姓を賜った。小乙上副使吉士駒に小山上を授けられた。

（講談社学術文庫『日本書紀』下、195頁）

筑紫は出発地（有明海側）であり到着地（博多湾側）なのだろう。すなわちこの遣使の主体は九州王朝なのではなかろうか。だから第二船が薩摩で沈没するという事故に遭遇したのだろうし、７月２４日、筑紫に着いて、直ぐ（４、５日で）に、吉士長丹・吉士駒らが恩賞を賜っていることからも、この遣唐使は筑紫で任務を終えている。又、学生として留学した氷連老はこの後、百済救援に参戦して、筑紫君薩夜馬らと唐の捕虜になっている。

この白雉４年の遣唐使は、筑紫に都をおく九州王朝の遣使で間違いなかろう。その宮室の名は、博多湾（港）から至近距離にある「難波長柄豊碕宮」以外にない。

## ２）難波長柄豊碕宮とは

筑紫の難波にあった難波長柄豊碕宮関連の記事を『日本書紀』から概略列記すると

Ａ：大化元年（645年）冬十二月九日天皇は都を難波長柄豊碕に移された。

（講談社学術文庫『日本書紀』下、165頁）

Ｂ：白雉二年（651年）冬十二月晦日‥‥この時、天皇は大郡（おおごおり）から遷って、新宮においでになった。この宮を名付けて難波長柄豊碕宮という。

（講談社学術文庫『日本書紀』下、191頁）

Ｃ：白雉三年（652年）秋九月豊碕宮の造営は終わった。

（講談社学術文庫『日本書紀』下、192頁）

Ｄ：白雉五年（654年）冬十月、皇太子は‥‥難波宮に赴かれた。十日天皇は正殿で崩御された。

（講談社学術文庫『日本書紀』下、196頁）

Ａの大化元年の難波長柄豊碕への遷宮記事は「大化（『日本書紀』では６４５年～６５１年、『二中歴』では６９５～７００年）年号と共に、『日本書紀』編纂者の改竄であって、Ｂの白雉２年記事の大郡（おおごおり）から遷宮したとする記事が本来であろう。大郡からの遷居であるから「難波―長柄―豊碕」と細かく表示しなくても「長柄宮」か「豊碕宮」で十分で事実、豊碕宮と記載されている。難波長柄豊碕宮＝豊碕宮であって、難波長柄豊碕宮は難波宮ではない、という認識が必要であろうし、難波長柄豊碕宮や大郡（おおごおり）宮は九州王朝の都城である「倭京」（注２）を構成する天子の居宮と云う事になる。

又、『二中歴』の白雉年号（６５２年～６６１年）は９年間であって、孝徳天皇（白雉年号期間を統治した天子）の白雉５年の難波宮で崩御したにも関わらず、改元されることなく白雉年号は９年まで続いている。

①九州王朝の天子‥‥難波長柄豊碕宮で統治

②大和王朝の大王‥‥難波宮

『日本書紀』孝徳天皇紀は天智天皇の傀儡政権のように、貶めて記述されているのは九州王朝の天子だからであろう。そのことを示すものに

（白雉）三年春一月一日、元日の拝礼が終わって、帝の車駕は大郡宮に帰られた。

（講談社学術文庫『日本書紀』下、192頁）

の記述がある。「帝の車駕」＝天子（注３）である。九州王朝の史書『日本紀』の残像であろう。

このような不自然さは孝徳天皇紀には異なった別々の人格が合成されて記述されている為、と考えて良いであろう。例えば神功皇后紀の卑弥呼・壱与・倭王旨のように複合した人物が合成されているのが『日本書記』の記述の特徴のひとつになっている。それと同じ手法である。

**D**の記事は大和王朝の大王の崩御記事とその宮名である。天武紀に記述されている難波宮（前期難波宮）は白雉５年には未だ完成していない。

上の**A**と**B**は元々違う記事を「難波宮＝難波長柄豊碕」と、結び付けているもので『日本書紀』編纂者の改竄結果でもある。

### ３）『新唐書』では

**永徽（えいき）初其王孝徳即位改元曰白雉**

（『新唐書』東夷・日本国伝）

と記述され、孝徳天皇の即位は「白雉」となっているが、『日本書紀』では大化５年間と白雉５年間を統治した天皇となっている。九州年号では、白雉は６５２年～６６０年の９年間、大化（注４）は６９５年～７００年の６年間であり孝徳天皇が大化と白雉を統治することなど、上の『新唐書』の記述からもあり得ない。

### ４）九州王朝の冠位制度

遣唐使の大使小山上吉士長丹が少花下に・副使小乙上吉士駒が小山上に昇進した記事のある、『日本書紀』孝徳紀①②の白雉年号記事は九州王朝の史書である『倭国日本紀（仮）』から盗用し転用して編纂され、『日本書紀』大化５年の「冠位十九階」の小山上・少花下・小乙上・小山上の冠位記事も九州王朝の史書からの盗用となる。この様に考えた時に『続日本紀』に記す、

大宝元年３月２１日条

**始依新令改制官名位号**

（新日本古典文学大系『続日本紀』一、36頁）

が生きてくる。すなわち大和朝廷の冠位制度は大宝律令が始めてだった、ということになる。それまでの冠位制度は九州王朝が制定していた。[*1]

又、遣唐使の大使吉士長丹や副使の吉士駒は九州王朝サイドの人物となる。推古天皇１６年（６０８年）の遣隋使は実際は推古２８年（６２０年）の遣唐使である。小野妹子を大使、吉士雄成を小使として裴世清を送るメンバーの中の「吉士雄成」と同族（親子か？）と、考えられる。唐との外交に詳しいことを買われて大使・副使に任命されたのであろう。

**（注１）西海使**

西海使＝遣唐使とし、本来九州王朝の遣唐使だったものを大和王朝の遣唐使とするもので、書紀編纂者の創作である。

この他に九州王朝の遣百済使にも「西海使」を挿入することによって、大和王朝の遣百済使であるとする盗用手法がこの「西海使」の用語である。それの実例を概要列挙すると

①斉明二年（６５６年）

**西海使の佐伯連栲縄・小山下難波吉士国勝らが百済から還り献鸚鵡一羽をたてまつった。**

（講談社学術文庫『日本書紀』下、199頁）

②斉明三年（６５７年）

**西海使の小花下阿曇連頬垂・小山下津臣傴僂（くつま）が百済から還り駱駝1匹、驢馬2匹をたてまつった。**

（講談社学術文庫『日本書紀』下、199頁）

③斉明四年（６５８年）

**西海使の小花下阿曇連頬垂が百済から還り言うには「・・・・・」と報告した。**

（講談社学術文庫『日本書紀』下、206頁）

上記の①～③の西海使である小山下・小花下等の冠位は九州王朝の冠位であり、佐伯連栲縄・難波吉士国勝・阿曇連頬垂・津臣傴僂の人物は九州王朝サイドの人物ということになる。すなわち、九州王朝史料からの盗用記事である。

**（注２）倭京**

難波長柄豊碕宮、大郡（おおごおり）宮、味経（あじふ）宮、飛鳥清御原宮を包括する筑紫にあり天子の理務がおこなわれた宮室と、実務を行う朝廷機能を持つ太宰府があり、法隆寺の移築元である法興寺や博多湾岸沿いの難波四天王寺が建立されていた。

*1 冠位制度は、拙著「九州王朝の『評と冠位』考」（『東海の古代』第１５０号、平成２５年２月）を参照されたい。

『二中歴』記載の九州年号の倭京は６１８年～６２２年の５年間であり、

二年難波天王寺聖徳建

（『史籍集覧』二十三冊、36頁）

と記載されている。これによれば、６１８年、条坊制の整った倭京の都城が完成し、その１年後に難波四天王寺も完成したことになる。倭京は６１８年から『二中歴』大化元年（６９５年）に新益京に遷都するまで、７６年間の九州王朝の京師であった。

（注３）車駕

岩波文庫『日本書紀（四）』の注書では、車駕＝天皇とするが、儀制令天子条に「行幸の際の君主に対する尊称。」とあり、車駕＝天子である。白雉年号時代は、未だ「天皇」の尊称はなかった。天皇の用語使用は白村江敗戦後となる。金石文では、野中弥勒菩薩像の銘文には「中宮天皇」があり、丙寅年（６６６年）の表記がある。九州王朝が天子から天皇の称号に変えたのである。

（注４）『二中歴』大化元年

『二中歴』大化元年（６９５年）、倭京から新益京への遷都を祝って九州王朝が「大化」と改元した。[*1]

## １２月例会報告

### ○　弥生時代に鉄製錬はあったのか？

知多郡阿久比町　　竹内　強

１１月例会に引き続き、古代の製鉄について報告した。

鉄鉱石や砂鉄からの鉄の製錬は、１５００℃の温度を必要とする。弥生時代の倭人には１５００℃の温度を確保するのは難しいのではないか？　だとしたらどのようにして弥生時代の鉄製品は生み出されたのか？

その方法は、

①中国、朝鮮半島から製品になった状態で運ばれてきた。

②外国で製鉄された鉄片を持ち込み倭国内で加工した。

③鉄鉱石、砂鉄を使った製錬技術を知っていた。ただ、製鉄炉見つかっていないだけである。

④１５００℃を必要としない製鉄方法を知っていた。

この中で、注目すべき方法として④の場合を考えてみた。果たしてそんなことができるのか、褐鉄鉱、酸化鉄黄土（Fe203）から鉄鋼を作る方法では１０００℃程度の温度で可能なことがわかった。更にこの材料はパイプ状ベンガラで日本全国採取可能である。

この材料を使った製鉄がどこから伝えられたか。どこで最初に始められたかについて推論を述べた。

### ○　『増補 上世年紀考』における干支二運繰り上げ説について

名古屋市　　石田敬一

那珂通世の『増補 上世年紀考』の第四章「神功・應神ノ二御代ノ考」の写しを資料とした。この『増補 上世年紀考』は、神功・應神紀における干支の二運繰り上げ説を補強するための考察である。たしかに、『日本書紀』と『東國通鑑』のそれぞれの関連記事と干支が二運の差を持っておおむね合致しているが、日本と韓国の一部の史料が合致することをもって、正しい紀年を表しているとするのは疑問であると私見を示した。

また、これらの記事の干支が二運の差を持っていることについて、那珂通世は、本居宣長の『古事記傳』を引用し、その根拠を「傳への亂」とするのみである。根拠薄弱であると批判した。

### ○　製鉄技術の多元的発展

名古屋市　　佐藤章司

大野晋氏の研究である「古代タミル語と古代日本語」について、以前から興味を覚えていたのであるが、今回、『多元』NO１１８　nov2013に記載されている上のタイトル記事（川崎市

*1　詳しくは拙著「新益京は九州王朝の終都」（『東海の古代』第１５２号、平成２５年４月）を参照されたい。

下山昌孝氏）の内容が参考になったので「古田史学の会・東海」の１２月例会において紹介した。

要旨

弥生時代早期の北九州出土の鉄器類は、中国や朝鮮半島からの伝来と考えるよりも南インドのタミル文化圏から直接導入され、その後八世紀になって中国の技術が導入された、と考えた方が無理なく理解できるとの論説である。

会員の中からは、製鉄技術とは別に雷山千如寺大悲王院を開山された１７８年に渡来したインドの僧清賀上人がいるとの解説があり、言語・製鉄・仏教等から古代日本と特に南インドとの接点に一層の興味をもった。

### ○　水田稲作のはじまり

名古屋市　　佐藤章司

東北の水田稲作は、１９８３年に青森県垂柳遺跡では畔で区画された水田跡が発見された。さらに青森県砂沢遺跡では水田跡から「遠賀川系土器」が発見され、青森県の水田稲作は弥生前期末までさかのぼることが出来る。

水田稲作は一毛作であれば５～１０月の温度によって、収穫が決まるので、九州からの伝来も可能だった？　弥生時代の気温状況の解明が待たれる。

佐藤の見解として、上の水田跡は北部九州の板付遺跡や菜畑遺跡の水田跡と類似するので九州人が青森（垂柳遺跡）に移動して住み付いたのであろうと発表した。この背後には「天孫降臨」が史実としてあり、

１、稲作民を征服、支配した。⇒魏志倭人伝の大人の祖先

２、海人族の支配を受け入れた。⇒魏志倭人伝の下戸の祖先

３、青森（東日流）へ稲作技術を持って逃れた。⇒弥生前期末の垂柳遺跡人ではないかと発表した。

例会参加者から弥生前期末の北九州から青森への移動は無理ではないかとの指摘があったが青森へ流れ津軽海峡に抜ける対馬海流に乗って移動すれば可能であろう。事実ゴボウウラ貝の腕輪が遺跡から出土している、と述べた。

## １月例会予定

**日　時：** 1月19日（日）午後１時30分～５時

**場　所：名古屋市市政資料館（第１集会室）**

名古屋市東区白壁１丁目３番地

Tel:052-953-0051

**参加料：５００円（会員無料）**

**交通機関**

・地下鉄名城線「市役所」駅下車、東徒歩８分

・名鉄瀬戸線「東大手」駅下車、南徒歩５分

・市バス「市政資料館南」下車、北徒歩５分等

**駐車場**

・名古屋市市政資料館：１２台収容(無料)

・ウィルあいち(愛知県女性総合センター)地下駐車場：南隣、有料（３０分１７０円）

・鈴木不動産コインパーク：南東角交差点の東、有料（４０分２００円）

## 今後の予定

**２月例会**：2月　9日（日）名古屋市市政資料館

**３月例会**：3月16日（日）　　〃

例会は、２月は**第２日曜日**、３月は**第３日曜日（黄當時講演会）**です。

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。

例会での研究報告、見解発表は大歓迎です。資料を配付される場合は、「**20部**」ご用意願います。

## 黄 當時講演会

本会会員である黄 當時氏（仏教大学教授）の講演会を行います。

１日時：２５年３月１６日（日）
　　午後１時３０分

２場所：名古屋市市政資料館

３演題：金印「漢委奴国王」の読みと意味

※講演会は３月例会として行います。